

# 私のオピニオン 丸山俊一

Shunichi Maruyama

NHKエンタープライズ 番組開発エグゼクティブ・プロデューサー

「リンゴを高く売ることによって夢中になっているうちに、リンゴの味を忘れてしまったのか？」という意味深いナレーションが流れたNHK BSの『欲望の資本主義』シリーズを企画した丸山俊一さん。グローバル資本主義が席卷するこの時代、私たちは何を考え、何を大切に生きていけばよいのか。「資本主義の本質」を踏まえ、語っていただきました。

ポスト産業資本主義では、時に農畜産物の価格でさえ、「交換価値」の論理で決まる「錯覚」が生まれます。

### “根源的な問い”を立てる

2016年から『欲望の資本主義』という異色の教養ドキュメンタリーを制作し、今年の正月には第4弾を放送しました。

冷戦構造解体後の四半世紀あまり、皮肉にもストッパーの役割を果たしていた社会主義の壁が崩壊し、テクノロジーの進歩に伴い、加速度的に進んだグローバル資本主義は、地球上を市場の網で覆い、まるで席卷するアメーバのようです。富の集中、社会に広がる閉塞感<sup>へいそく</sup>、リーマンショックにも象徴される資本主義の行き詰まりも指摘され、「資本主義の終焉<sup>しゅうえん</sup>」さえ主張する経済学者もいます。番組では、資本主義の先行きが不透明となり、われわれを取り巻く経済論理も見えにくくなっている時代に、



改めて「資本主義とは?」「欲望とは?」「人類はどこに行こうとしているのか?」という“根源的な問い”を立ててみようと考えました。時代の様相が変化するときこそ、次代を開くヒントや新たな認識の可能性は、常に“根源的な問い”から始まるのです。

### 交換価値と使用価値を取り違える錯覚

そもそも資本主義は、欲望が欲望を生むシステムという言い方もできると思います。殊に第3次産業が主流となるポスト産業社会と言われるような現代の資本主義では、人の「感情」さえ「商品化」されるということがしばしば起こり、こうした「欲望のスパイラル」が起きやすいと言えるのかもしれませんが。買い手がいる限り「商品」が生まれ、さまざまなモノが商品化されていく。そのこと自体は市場の自由を保障する健全な動きで否定はできませんが、人と人を結ぶサービス、そこに生まれる「共感」という無形の感情が市場の「主力商品」となるという時代状況には、少し慎重になった方がよいでしょう。

例えば「使用価値」と「交換価値」という概念があります。使用価値は、モノが持つ本来の価値、例えば農産物なら、それが持つ味や栄養素などです。交換価値は市場で取引される価格で、売り手と買い手が合意することで決まる価値というわけですね。無形のサービスが商品になる第3次産業でもその市場の論理は変わらないわけですが、その時、使用価値と交換価値の関係はねじれ、大きく揺れ動きます。なぜなら、そこでの使用価値の根拠は、人

の感情という、極めてぶれやすいものにあるのですから。

例えば人気のコンサートは、数十万円以上の価値を見いだす人もいれば、全く関心のない人には価値そのものが生じない、ゼロ円です。気が変わることもあるでしょう。絶賛から酷評へ……、その逆もあるかもしれません。つまり、ある時間、ある空間を過ごす「満足感」という人間の感動体験という商品は、その価値の決定が主観的なものに大きく依存してしまうのです。

感情によって生み出された一時的な高揚感、熱狂、カタルシスなどが商品となって、その主観的な価値を高めるほどに、市場での「交換価値」も上昇し、そのことが体験の満足度を高め、さらに主観的な価値を高めるという「倒錯」を生み出すこともあるかもしれません。

例えば、1個100円だったリンゴが、人気タレントに由来するブランド名を付けるとか、こだわりの方法で栽培しているなどの「情報」が付加されたりすると1,000円でも売れることもあるのかもしれませんがね。価格を決めるのはリンゴの味覚（使用価値）でなく買い手の満足感（交換価値）で、その本質的な価値さえも決まるという「錯覚」が生まれるのです。

「交換価値」こそが価値だという「錯覚」は、ポスト産業資本主義のシステムにあっては、日常的な現象だと言えます。リンゴを例に挙げましたが、さまざまな市場で「交換価値」の論理によって取引される比重がどんどん高まり、人間の体験、共感、感情が市場の中で交換可能なモノや情報に置き換わり、「商品」「消費財」となりやすいのです。ネット社会、SNSなどの



丸山俊一さんの最近の著作

影響で、感情は拡散、増幅し、「交換価値」を高めること自体が、一つの「使用価値」であるという「錯覚」が生まれる条件がそろっています。目的と手段が逆転する状況が生まれるとも言えるでしょう。

しかし、こうした「錯覚」によって資本主義は日々更新され、人々の自由を実現しているという側面も否めないのは先に触れた通りです。このジレンマに安易な結論を出そうとしてはいきけません。資本主義は、常に2つのレベルの錯綜、パラドックスを先送りしながら、やり過ぎていくことで、何とか保たれているのです。白か黒かの二択の「結論は出さなくてもいい」のです。大切なのは、思考停止しないで、「問い」を立て、考察、思考を続けることです。

### ■ 歩みを楽しむ「カメのセンス」を

ウサギとカメの競争という寓話<sup>ぐうわ</sup>があります。足の速いウサギが怠けている間に、努力していたカメが追い抜き、勝つのですが、そもそも、カメに競争に参加したという意識はあったのでしょうか。自らの歩みそのものを楽しんでいるうちに、いつの間にか勝っていて、ウサギ

結論を出さないことが重要で、大切なのは思考停止しないで、“根源的な問い”を立て考察を続けることです。

## 日本人は社会に「過剰適応」し自縄自縛するのでなく、自分だけの「絶対的な価値観」を大切にすべきです。

が勝手に悔しがっただけ……。そんな発想で今一度物語の構図を逆転させてみるのも面白いと思います。

現代の農業でも、もしかすると、カメのセンスが必要なのではないのでしょうか。『欲望の資本主義』の中でも、「リンゴを高く売ること」に夢中になっているうちに、リンゴの味を忘れてしまったのか? というナレーションを考えました。現代の資本主義は、ともすればリンゴを「高く売る」ことばかりに人々の心を駆り立てているように思われます。時代に合わせて、利益や効率を追求するという農業をしているうちに、意識することなく多くの人々がウサギになってしまうのではないか、そもそも競争のルールは勝手に敷かれたもので、それに乗るのが果たして正しいことなのかと、「問い」を立て考察することが、ここでも大切なのです。

### 問題は日本人の「過剰適応」

資本主義は、GDP（国内総生産）に代表される「数字の物語」が独り歩きしがちです。

農業でも、科学的に数値化されたものが全ての真実を示しているとなりがちです。例えば、リンゴであれば、栄養価をはじめ、糖度などの食べたときの味覚さえも科学的に解析し、数値化されています。現代社会が重視してきた科学的な手法です。使用価値の客観化など、数値化することには、もちろん大事な意義はありますが、測定することのできない価値が農業にはあるはず、という視点も大事です。

数値化されたデータを使うのは人間です。農業を文明論という大きな枠組みから考えれば、

人間は「大地の恵み」を受けて生きていますと捉えることができます。また、「胃袋が喜んでいいる」という“動物としての身体感覚”もあります。数値化されたデータだけでなく、「人間もまた動物だ」という壮大な歴史、文明論的な視野での再認識も大事な時代に入っていると思います。

現代の資本主義には勝者がいないとも言えます。資産を何十、何百億円と持っている富裕層の人でさえも、「やめられない」「止まらない」。欲望に“終わり”はありません。いくら稼いで、貯めても、際限がなく、安寧を得ることとは無関係のようです。

ベストセラーを何冊も出したような作家でも、わずかの間作品を発表しなかつただけで、「あの人ももう終わった」「あの作品だけだった」と烙印らくいんを押されることを恐れ、レースから降りられないと感じているケースもあるでしょう。本当に多くの人々が、いつも競争から降りられないという強迫観念に支配されているようにも感じます。社会の空気に過剰適応し、視野きょうさく狭窄に陥ることなく、さまざまな角度から物事を捉え直す柔軟性が大事ではないのでしょうか。新しい試みや成果を上げることにポジティブな気持ちで取り組むのならば、問題はないのですが、単に、数字のレースから降りられないのなら、一度立ち止まるべきです。

自分自身と対話し、内省の時間を大事に、自らを再発見してほしいですね。偏差値のような相対的な評価軸でなく、自分だけの「絶対的な価値観」を持つことも大切です。今こそ、「自らの歩みを楽しむカメ」のセンスを持つときです。

## 個人が「主体的」に判断できる時代に

私は30年ほど前のバブル時代に学生生活を送ったのですが、人々が消費を享受し、日本全体が高揚感に包まれていた輝かしい時代と、今でも多くのメディアがステレオタイプで描きがちですが、地方から出てきた私にとっては、必ずしも明るい面ばかりでもありませんでした。豊かさの中にあつた「同調圧力」は人々の人生の選択にも圧力をかけ、違和感を覚えたとしても経済の論理が圧倒的優位の中、「余計

なことを言うな」「波に乗れ」という空気が社会を支配し、同世代の仲間たちが黙々と企業戦士になっていくことにもジレンマを感じていました。

現代は、一見「上り坂」から「下り坂」へ、と言われがちですが、視点を変えれば、個人が「主体的」に判断できる可能性に満ちた“良い時代”です。農業を志す若い人には、混沌こんとんとしている時代だからこそ、むしろチャンスがあると、逆転の発想を培ってほしいと願っています。

### まるやま・しゅんいち

1962年、長野県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、NHK入局。『英語でしゃべらナイト』『爆笑問題のニッポンの教養』『人間ってなんだ？超AI入門』『ネコメンタリー 猫も、杓子も。』ほか、異色の教養番組を企画開発、プロデュースし続ける。東京藝術大学、早稲田大学で非常勤講師も務める。著書に『結論は出さなくていい』（光文社）、共著に『欲望の資本主義』シリーズ（東洋経済新報社）、『マルクス・ガブリエル 欲望の時代を哲学する』（NHK出版）など多数。最新作は『14歳からの資本主義～君たちが大人になるころの未来を変えるために』（大和書房）。

